

2025 年度 健康医療スポーツ学部

リハビリテーション学科理学療法コース

学修行動と学修成果の調査結果分析

リハビリテーション学科理学療法コースでは、建学の精神(実学の精神)に則り、基礎知識、理論の修得、幅広い専門知識や技術を身につけ、対象となる方が住み慣れた場所で暮らすことができるための理学療法を展開できる人材養成を教育目標に掲げ、基礎科目・専門科目を配置している。カリキュラムポリシーにおいては、地域住民と密着した医療人を養成する目的を達成できるように、基礎学力や基礎教養の向上を目指す教養科目、及び人体や医学全般に関して学び、医学及び理学療法学の学問内容と技術を理解するとともに、地域社会における健康・医療の実践を養い、学生同士が明晰かつ批判的に思考できるようになることを目指している。1. 本学の「目標とする力」がどの程度身に付いたか、2. 授業・学修関連の分析、3. 授業以外の学生生活について、4. 身に付いたかと感じる能力について、5. 4年生の回答に関するまとめ、とし分析結果をまとめた。

1. 本学の「目標とする力」がどの程度身に付いたか

設問1「人間愛(利他の心)」については、学年を追うごとに「十分身に付いた」「やや身に付いた」の回答割合が増加し、3・4年生では 94%以上が身に付いたと回答した。設問2・3・5の「他者と協働する力」「自立して逞しく生きる力」「専門性を高める意欲と力」についても、3・4年生では「全く身に付いていない」の回答が0%となり、自身の成長を実感している結果であった。設問4・6「創造的な問題解決能力」「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」については 90%以上が「十分身に付いた」「やや身に付いた」と回答したが、「全く身に付いていない」の回答がわずかにあることから、近年急速に求められている内容について、学修内容やアクティブラーニングの方法を見直す必要がある。

2. 授業・学修関連の設問について

設問7「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」は全学年を通じて 80%以上が「頻繁にした」「時々した」と回答し、例年を上回る結果であった。また学年が上がるにつれ、この割合は増加し、2年生以降では「全くしなかった」の割合は0%、4年生においては 95%が「頻繁にした」「時々した」と回答した。設問9「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」では、「頻繁にした」「時々した」の割合が1~3年生では 50%台であったのに対し、4年生では約 70%で、4年生では学修に関する積極的な行動や教員とコミュニケーションを取ることに躊躇等が少ないことが予想される結果であった。設問 10「就職や資格取得に関わる勉強」では、「頻繁にした」「時々した」の割合について1~3年生で 50%台であったのに対し、4年生では 91%であった。設問 14 における

「授業時間外に行なった予習や復習、授業課題のための学修時間」で1～3年生は多くが「1～2時間」「1時間未満」であるのに対し、4年生では「2時間未満」が6%、「5～6時間」「7～8時間」「8時間以上」の割合が半数を占めた。国家試験勉強が本格化し、具体的な目標に向かって能動的に学修に取り組んでいることが示された結果と考えられる。設問 12・13 の「メディアライブラリーセンター（図書館）の利用」「学内の自習教室等の利用」についても、「頻繁にした」「時々した」の回答が1～3年生で 50～60%台であったのに対し、4年生では約 80%であった。また設問 19「授業期間中の欠席回数」では、平均欠席回数 3 回以上の割合が、1年生 24%、2年生 19%、3年生 11%、4年生 6%と、授業・学修に対する心構えや基本的生活の定着が学年とともに上向きになっていることが示された。

3. 授業以外の学生生活について

設問 20・22「部活動やサークルの回数」「ボランティア活動の回数」においては、3・4年生では回数が週当たり 1 回または 1 回未満の回答が多くあった。設問 21「アルバイトの回数」では 4 年生では 2 回未満の回答が目立った。

大学での教育や設備、学習支援に関する満足度では、設問 23「授業の内容」、設問 24「所属する学科・コースのカリキュラム」において、全学年で 80%以上が「とても満足」「やや満足」と回答した。設問 27～29「演習室や実習室の設備」「メディアライブラリー（図書館）」「事前事後学修・課題のための学修スペース」については、概ね 80%以上が「とても満足」「やや満足」の回答を示した。

設問 32～34「学科・コース教員による指導・相談」「事務職員によるサポート」「就職支援室による支援」では、全学年で「とても満足」「やや満足」の回答が 80%以上を占め、学修に対する支援体制における満足度は高い結果であった。

一方で、設問 37・38「卒業後にやりたいこと」「希望の就職先」については、4 年生以外1・2・3年生で不安に感じている割合が 30～40%台であったため、セミナー科目等を通してキャリアについての内容を再検討していく必要がある。また、身体面・精神面での健康状態に不安を抱いている学生が一定数いることから、個別面談やサポート体制周知等によるフォロー体制をさらに充実させる必要がある。

デジタルツールの使用に関する設問では、設問 45「生成AIの使用」について全学年で約 70%が「頻繁に利用している」「時々利用している」と回答した。また設問 46「生成AIの主な使用用途」では、「授業課題やレポートの作成」「情報の収集」が大半を占めていた。設問 47「生成AIから出力された結果が正しいか確認しているか」について、全学年で 80%以上が「確認している」「時々確認している」と回答し、出力された情報を鵜呑みにせず確認作業まで行っている学生が多数であった。

4. 身に付いたと感じる能力(学修成果)について

ディプロマポリシーに掲げている知識・理解(社会人としての幅広い視野に立った教養・多様性の理解)、汎用的能力(コミュニケーション・自分の考えを伝える手段と能力)を反映している設問であ

る設問 51~56 において、「十分付いた」「かなり付いた」の回答について学年が上がるごとに右上がりに割合が増加した。とくに「他者との協働」「ものごとを分析的に考える力」については 3 年生以降で顕著に増加した。

設問 57~71 までの理学療法士としての知識面・技術面(解剖学的・運動学・生理学・理学療法評価・内科系・外科系・神経系・精神医学・発達学等)に関する設問では、いずれのも項目も「十分付いた」の割合が 1 年生から3年生に比べて、4年生では顕著に増加し、身に付いたと感じている結果が示された。設問 72~80 における理学療法士として働いていくうえで必要な能力(使命感・責任感・倫理観・守秘義務・規律・記録と報告・多職種との連携等)については、特に3・4年生で身に付いたと感じている割合が高く、臨床実習前教育や臨床実習において、実際の臨床場面で対象者や専門職と接することで身に付いたと実感していることが考えられる。これらはカリキュラムポリシーで掲げている内容を反映しており学修効果が表れていると推察できる。設問 81~83 の理学療法分野における研究に関する設問では、1・2年生で 35~40% 台であったのに対し、3・4年生は、60~80%が「十分付いた」「かなり付いた」と回答した。臨床実習に加え研究方法論・卒業研究などを通じて学術的な理解や探求心、自ら研究することの意義が醸成されたものと考えられる。

5. 4 年生についてのまとめ

4 年生では、「人間愛(利他の心)」「他者と協働する力」「自立して逞しく生きる力」「専門性を高める意欲と力」について身に付いたと感じている学生が多く、本学の目標とする力について身に付いたと実感している学生の割合が多くあった。学修面では、生活時間のなかで学修時間が占める割合が大幅に多く、趣味や余暇活動等に割く時間が少なかった。一方で睡眠時間は他学年と差がないことから国家試験へ向けた明確な意識のもと規律正しい生活が身につけているものと考えられる。また、カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーで掲げている項目に準じた設問では他学年に比べ、その能力が身に付いたと実感している学生が多くを占めた。

以上

2025 年度 健康医療スポーツ学部

リハビリテーション学科 作業療法コース

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

健康医療スポーツ学部リハビリテーション学科作業療法コースでは、建学の精神と卒業認定・学位授与の方針に掲げた教育目的を達成するため、以下①～⑤カリキュラムを編成し授業を行うこととしている。

① 大学での学修の基礎となる全学共通科目(必修)として、セミナー科目、英語、および情報リテラシー演習・DS 概論を開講し、社会生活を営む上で必要な教養とコミュニケーション能力を養成する。

② セミナー科目では 6 つの力の養成を基礎としつつ、学年進行に合わせながら経時的に 1 年生から 4 年生までキャリア教育を行う。特に 1～2 年次のフレッシュセミナーでは、大学生活や社会生活への順応と、コミュニケーション能力の向上を目指す。さらに 3～4 年次に行われるアドバンスセミナーでは、卒業後の社会生活に対応した責任感、倫理観、自己管理能力を身につける。

③ 保健医療に携わる者として求められる豊かな人間性と教養を養成するとともに、関連する職種と連携して働くための協調性、責任感、基礎知識、コミュニケーション能力を身につける。

④ 学内演習や臨床実習などを取り入れながら、地域社会に根ざしたリハビリテーションの実践に必要な専門科目を配置し、作業療法の基礎知識と専門知識・技術を修得する。

⑤ 国家試験受験資格取得に必要な科目を系統的に配置し、身体機能・精神機能・発達機能・高齢期の 4 領域と、急性期から社会復帰まで幅広くシームレスな対応を必要とする作業療法の専門知識と技術を修得する。

上記の内容を踏まえ、2025 年度の学修行動評価アンケートの結果を、1. 目標とする力、2. 授業関連事項、3. 授業期間中における時間の使い方、4. 授業期間中における実施事項、5. 教育内容や設備、学修支援への満足度、6. 不安や悩み、7. デジタルツール、8. 上級学年(4 年生)の調査結果について分析する。

1. 目標とする力

目標とする力について、「十分身に付いた」と「やや身に付いた」を積極的な効果と捉えた場合、人間愛(利他の心)については 96.0%、他者と協働する力については 98.7%、自立して逞しく生きる力は 89.3%、創造的な問題解決能力では 92.0%、専門性を高める意欲が 97.4%、わが国と世界の持続・発展に尽くす力では 81.4%と高水準を示した。特に、人間愛(利他の心)、他者と協働する力、創造的な問題解決能力、専門性を高める意欲と力では 4 年次にて 100%となっており、本格的な実習の経験が大きく影響しているものと考えられる。

2.授業関連事項

授業の予習や復習、manaba を用いた学習、授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問、就職や資格取得に関わる勉強などについては「頻繁にした」を主体的な学習と捉えた場合、授業の予習や復習では 25.3%、manaba を用いた学習では 36.0%、授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問は 13.3%、就職や資格取得に関わる勉強などについては 36.0%であった。

また友人との一緒での勉強については 46.7% (前年度:グループワークでの回答は 51.2%)、図書館の活用は 22.7% (前年度 23.2%)と、概ね昨年度と同様の結果であった(前年度は「かなりした」の選択項目があり、「頻繁にした」に加えているため、前年度データは参考まで)。

3.授業期間中における時間の使い方

授業時間外での学習時間は、学習時間が1時間未満の学生が 16.0% (前年度 19.5%)であった。また学内で過ごす時間については 6～7 時間が 30.7%と最も多かった。睡眠時間は 5～6 時間が 34.7%で最も多く、6～7 時間の学生は 24.0%であった。一方、趣味や娯楽に費やす時間は 1～2 時間が 33.3%、2～3 時間が 30.7%であり、読書に費やす時間が 1 時間未満は 65.3%であった。

4.授業期間中における実施事項

授業の欠席回数については、「なし」「1回」との回答で 74.7%であった。また部活動やサークルへの参加も「なし」「1回」の回答が 86.7%であった。

アルバイトの回数については「なし」「1回」との回答が 22.7% (前年度 19.5%)と前年度から微増しているが、週3回以内でのアルバイトを実施している学生は 82.7% (前年度 81.7%)と微増した。一方、ボランティア参加については 25.3%が実施なしと回答しており、年に 1～2 回参加の学生は 49.3% (前年度 32.9%)と増加傾向であった。作業療法コース教員が地域貢献事業を展開していることが反映されていると思われる。新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着いたことから、アルバイト回数を増やす学生が増えてきたものと思われるが、学生の約 1/6 は学習時間が 1 時間未満であり、学修不足が懸念される結果となった。

5.教育内容や設備、学修支援への満足度

講義教室や実習室、図書室や保健室、学生食堂、就職支援室については概ね中間位を示した。しかし、講義教室の設備については、不満を感じている学生は 29.3%であった。新キャンパス設立まで目前ではあるが、現状の不満に対しても対応が必要と思われる。

6.不安や悩み

授業の内容について 38.7% (前年度 46.4%)の学生が、ついていけるか不安に感じていた。また学業を続ける上で経済的に困難さを感じている学生は 10.7%存在した。また 3 年次に 15%弱、4 年次には 30%程度の学生が身体的・精神的な不安をあげていた。3 年次からは本格的な臨床実習が始まり、一人暮らしをする学生も少なくない。そのような影響が結果に表れたと思われる。

7. デジタルツール

生成 AI の利用程度は「頻繁に利用している」「時々利用している」を併せて 81.4%と高値であった。主な利用用途については、「情報の収集」が 49.3%で一番高く、次に「授業課題やレポートの作成」で 22.7%であった。「生成 AI から出力された結果が正しいか確認しているか」に対しては、「確認している」「時々確認している」を併せて 84.0%で、「生成 AI の活用は自分の将来に必要なスキルか」に対しては「そう思う」「ややそう思う」を併せて 77.4%であった。

8. 最上級学年(4 年生)の調査結果

4 年生は国家試験対策として他の学生と協働学習する時間を多くとるよう指導しているため、他の学年に比べ「友人と一緒に勉強」する項目が高値であった。また授業時間外での学習時間が他の学年と比べると突出して長く、長時間国家試験勉強を行っていることがうかがえた。

アルバイト回数に関しても国家試験対策に専念するためか他の学年より大幅に少ない結果となっているが、週 3 回行っている学生も 6.7%存在した。

身についた能力では、作業療法士になる使命感・責任感・倫理観では「十分付いた」「かなり付いた」を併せて 80.0%、守秘義務の理解と秘密を守る態度では 86.7%、規則や約束を守る態度では 93.3%と高値を示しており、長期の臨床実習による学修の影響を受けたと考えられる。

まとめ

2025 年度は感染症の影響も小さくなり、学生の活動も活発化した。一方で、アルバイトの実施回数を増やす学生も増えてきており、結果的に自主学習時間が減少している。4 年次においても過度な回数のアルバイトを入れている学生が増えており、国家試験対策の点からも十分な指導と支援が必要と思われる。

経済的な不安を抱える学生も 10%程度存在するため、配慮が必要である。解剖学的基礎知識、生理学的基礎知識、運動学的基礎知識では、4 年次にて「全く身につけていない」は 0%だが、1 年から 3 年では 1 割前後存在する。国家試験対策の指導において最も苦慮する分野であり、早い段階で対策を講じる必要がある。一方、作業療法の対象・目的・方法に関する知識や作業療法支援に関する基礎知識、作業療法士の役割に対する理解では、1 年から 4 年を通して「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」の範囲に収まっていた。

作業療法の専門性については十分学修されていることが伺われるが、解剖学や生理学、運動学といった基礎医学の習得には難を強いられており、より一層の教員による学修支援を講じる必要があると考えられる。

以上

2025 年度 健康医療スポーツ学部

柔道整復学科

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

健康医療スポーツ学部柔道整復学科トレーナー・柔道整復コースでは、建学の精神である「実学の精神」に基づき、基礎知識や理論の修得に加え、幅広い専門知識と技術を身につけ、対象者が住み慣れた地域で安心して生活を継続できるよう支援できる医療人の養成を教育目標としている。この目的のもと、基礎科目および専門科目を体系的に配置している。また、カリキュラムポリシーにおいては、問題発見・解決能力の育成に加え、研究内容を論理的に整理し、その成果を他者に分かりやすく伝える力や得られた知識や成果を他者と共有するコミュニケーション能力の向上を重要な柱としている。

本報告書では、2025 年度学修行動調査アンケートの結果をもとに、①主体的な学修、②学修資源の利用、③大学設備・教育内容・学修支援、④授業時間外の学修時間・欠席・アルバイト、⑤学生生活（課外活動）、⑥成長実感（教養・専門・医療人能力）、⑦デジタルツールに関する項目の 7 つに分類し、分析を行った。なお、本分析は大学全体の結果も参考にしながら、柔道整復学科を主対象とし、特に教育成果が集約される 4 年生の傾向に着目して整理したものである。

さらに、2024 年度報告書の結果と 2025 年度のデータを比較することで、経年的な変化を把握することを目的とした。ただし、設問内容や集計方法が完全に一致しない項目もあるため、それらについては比較可能な範囲で解釈し、その旨を本文中に示している。

1. 主体的な学修について(大学全体)

表 1 主体的な学修に関する 2024 年度・2025 年度比較

項目	2024 年度	2025 年度	差
授業の予習・復習(1～4 年平均)	42.0%	83.5%	+41.5pt
授業の予習・復習(4 年のみ)	78.6%	93.8%	+15.2pt
教員への質問・意見表明(1～4 年平均)	23.1%	51.6%	+28.5pt

2025 年度の主体的学修は、2024 年度と比べて大幅に増加した。授業の予習・復習については、「頻繁にした」と「時々した」の合計が全体で 42.0%から 83.5%へ上昇し、4 年生でも 78.6%から 93.8%へ増加した。また、授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問・意見表明も 23.1%から 51.6%へ増加しており、2025 年度は学生の主体的な関与が強まったと解釈できる。特に 4 年生では、国家試験、就職、卒業を意識した学修行動が顕著であり、主体的学修が学年進行に伴って強化されていると考えられる。

2. 学修資源の利用(学修支援システム manaba や図書館)について

表 2 学修資源利用に関する 2024 年度・2025 年度比較

項目	2024 年度	2025 年度	差
友人と一緒に勉強(1～4 年平均)	55.0%	86.6%	+31.6pt
友人と一緒に勉強(4 年のみ)	64.5%	95.4%	+30.9pt
manaba 利用(1～4 年平均)	28.6%	65.8%	+37.2pt
図書館利用(1～4 年平均)	37.7%	61.4%	+23.7pt

学修資源の利用においても、2025 年度は増加傾向が明確であった。友人との協働学習は全体で 55.0%から 86.6%へ、4 年生では 64.5%から 95.4%へ上昇した。manaba 利用も 28.6%から 65.8%へ増加しており、2025 年度は対面型・デジタル型の双方の資源利用が進んだものとみられる。図書館利用も 37.7%から 61.4%へ上昇しており、特に国家試験対策期の学修場所としての活用が進んだ可能性が高い。2024 年度報告では 4 年生の manaba 利用が低いことが指摘されていたが、2025 年度は全体利用率の上昇が確認され、学修方法の多様化が一層進んだと考えられる。

3. 大学設備・教育内容・学修支援について

表 3 満足度に関する主要項目の比較

項目	2024 年度	2025 年度	差
学生生活満足度(1～4 年平均)	59.7%	89.0%	+29.3pt
学生生活満足度(4 年のみ)	57.4%	90.8%	+33.4pt
講義教室の設備(2025 年度)	—	65.0%	—
就職支援(2025 年度)	—	90.6%	—

2024 年度報告では、教育・学修支援に関する全般的な満足度は高い一方、「講義教室の設備」および「学生食堂」で不満がやや高いと記されていた。2025 年度では、学生生活満足度が全体で 89.0%、4 年生で 90.8%に達し、2024 年度の 59.7%、57.4%を大きく上回った。また、2025 年度は事務職員によるサポート 91.3%、就職支援 90.6%、保健室・付属医療施設 89.0%と人的支援の満足度が高かった一方、講義教室の設備は 65.0%にとどまっており、物理的環境については相対的に改善の余地があることが示唆された。

4. 授業時間外の学修時間・欠席状況・アルバイトについて

表 4 授業時間外学修・活動状況の比較

項目	2024 年度	2025 年度	所見
授業外学修 1～2 時間(1～4 年平均)	37.3%	29.9%	中心帯は維持
授業外学修 1 時間未満(1～4 年平均)	28.6%	25.2%	やや減少
4 年生の長時間学修(3 時間以上)	62.1%	73.8%	増加
学内滞在 8 時間以上(1～4 年平均)	—	26.8%	長時間滞在型
学内滞在 8 時間以上(4 年のみ)	—	60.0%	突出

授業時間外学修時間は、全体では 2024 年度・2025 年度ともに「1～2 時間」が中心であるが、2025 年度は「1 時間未満」が 25.2%まで低下し、低学修層の縮小がみられた。特に 4 年生では、2024 年度に 3 時間以上が 62.1%であったのに対し、2025 年度は 73.8%まで増加しており、国家試験対策を背景とした長時間学修の集中が確認された。さらに2025年度は学内滞在時間が長く、全体で「8時間以上」26.8%、4 年生では 60.0%に達した。なお、2024 年度本文には欠席状況の具体数値がなく、欠席回数の厳密比較は困難である。アルバイトについては 2024 年度に「何らかのアルバイト」が 89.4%と高かったが、2025 年度は 0～2 回が中心となっており、学業優先傾向が一層強まった可能性がある。

5. 部活動やサークル活動などの学生生活について

表 5 部活動・サークル活動(1週間あたり)および学生生活満足度の比較

項目	2024 年度	2025 年度	差
部活動・サークル『活動なし』(1～4 年平均)	58.0%	55.9%	-2.1pt
学生生活満足度(1～4 年平均)	59.7%	89.0%	+29.3pt
学生生活満足度(4 年のみ)	57.4%	90.8%	+33.4pt

「部活動・サークル活動」については、「活動なし」が 58.0%から 55.9%へわずかに減少し、2025 年度も 1～3 年では一定の参加がみられる。一方で 4 年生は 2025 年度に「なし」が 86.2%となっており、国家試験対策を優先する生活構造がより鮮明である。「学生生活満足度」は全体で 59.7%から 89.0%へ大幅に上昇し、4 年生も 57.4%から 90.8%へ上昇した。したがって、2025 年度は課外活動の比重を保ちながらも、学生生活全体に対する肯定的評価が大きく高まったものと考えられる。

6. 一般的教養・専門知識・医療人としての能力に関する成長実感について

表 6 成長実感に関する主要指標の比較(2024 年 4 年/2025 年 4 年)

項目	2024 年度 4 年	2025 年度 4 年	差
一般的教養	60.6%	72.3%	+11.7pt
身体の構造・機能の基礎知識	67.2%	81.5%	+14.3pt
運動器外傷の基礎知識	70.5%	80.0%	+9.5pt
柔道整復師としての知識・技術力	63.9%	80.0%	+16.1pt
メディカルスタッフとして行動できる力	62.3%	80.0%	+17.7pt
多職種連携力	57.3%	76.9%	+19.6pt
患者の人権を尊重する態度	73.8%	84.7%	+10.9pt
思いやりの心	73.8%	83.1%	+9.3pt

能力の伸長では、2025 年度は専門知識・医療人としての能力の多くの項目において、2024 年度を上回る結果となった。「一般的教養」についても、2024 年度 4 年生の 60.6%から 2025 年度は 72.3%へと向上し、これまで課題とされてきた基礎教養の定着についても一定の改善がみられた。特に、「身体の構造・機能に関する基本知識」は 67.2%から 81.5%へ、「運動器外傷の基礎知識」は 70.5%から 80.0%へ、「柔道整復師としての知識と技術力」は 63.9%から 80.0%へと大きく上昇した。また、「メディカルスタッフとして行動できる力」は 62.3%から 80.0%へ、「多職種連携力」は 57.3%から 76.9%へと伸長しており、医療人としての実践的能力の向上が明確に示唆された。一方で、プレゼンテーション能力や研究倫理に関する理解については相対的に伸びが限定的であり、今後は発信力および研究的思考力の育成を意識した教育の充実が求められる。

7. デジタルツールに関して

表 7 デジタルツール活用の概要(2025 年度)

項目	数値	解釈
生成 AI 利用(1～4 年平均)	68.5%	大学全体 70.6%とほぼ同水準
主用途:情報収集(1～4 年平均)	44.9%	大学全体 39.3%より高い
AI 出力を確認(1～4 年平均)	76.4%	利用の質は一定水準
AI 活用は将来必要(1～4 年平均)	83.9%	必要性認識は高い
オープンバッジ認知(1～4 年平均)	11.4%	大学全体 16.0%より低い
オープンバッジ活用意向(1～4 年平均)	6.7%	認知不足が主因

デジタルツールに関しては、2025 年度の「生成 AI 利用率」が 68.5%であり、大学全体の 70.6%とほぼ同水準であった。利用目的は情報収集 44.9%が最多で、授業課題・レポート作成 25.2%を上回った。AI

出力の確認は 76.4%が何らかの形で行っており、将来必要なスキルとみなす学生も 83.9%に達した。一方、「オープンバッジ認知」は 11.4%、活用意向は 6.7%にとどまり、国家資格中心の進路構造のなかでデジタル資格制度が十分浸透していないことがうかがえる。なお、2024 年度報告には同一項目の記載がなく、本節は 2025 年度単独の所見として扱う。

8. まとめ

2025 年度の柔道整復学科では、2024 年度と比較して、主体的学修、学修資源の活用、学生生活満足度、専門知識・医療人能力の成長実感が総じて向上した。特に 4 年生では、予習・復習 93.8%、友人との協働学習 95.4%、学内滞在 8 時間以上 60.0%と、国家試験学年に特徴的な学修集中構造が明確であった。また、専門知識と実践能力の伸長も著しく、2024 年度に比べて 4 年生の到達度が大きく上昇した。一方で、講義教室設備への満足度は 65.0%にとどまっているが、2027 年度には新キャンパスへの移転が予定されており、今後の学修環境のさらなる充実が期待される。また、読書時間の確保や研究倫理理解、発信力の育成、オープンバッジ認知の向上については、今後の教育の中で段階的に強化していくことが望まれる。したがって今後は、①低学年からの主体的学修支援、②ICT・AI 活用の質的向上、③研究倫理・発信力教育の充実、④新キャンパス移転を見据えた学修環境の整備と活用、を重点課題として位置づけることが重要である。

さらに、1～3 年生の段階においては、スポーツ・健康・医療分野に対する興味・関心を一層高めるとともに、教職課程やアスレティックトレーナー資格とのダブルライセンス取得、さらには将来的な開業(起業)も視野に入れた実学教育の充実が求められる。そのためには、実習・座学・実技を有機的に連動させながら、学びの魅力を学生に伝えていくとともに、教員自身も教育・研究活動を通じて継続的に研鑽し、その成果を教育へと還元していく姿勢が重要である。2025 年度の柔道整復学科は、学年進行に伴う専門能力の伸長がより鮮明となり、4 年生を中心に学修成果が集約された年度であった。今後は、この到達度の高さを 4 年生に限定するのではなく、1～3 年生の段階から段階的に育成できる教育設計へと接続していくことが重要である。

以上

2025年度 健康医療スポーツ学部

医療スポーツ学科 救急救命士コース

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

I. 本学の「目標とする力」の修得について

Q1「人間愛(利他の心)」、Q2「他者と協働する力」、Q3「自立して逞しく生きる力」、Q4「創造的な問題解決能力」の4項目においては、「十分身に付いた」「やや身に付いた」の合計が90%以上を占め、Q5「専門性を高める意欲と力」、Q6「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」の2項目においては、同合計が80%以上を占めており、本学の教育目標に対する教育成果が概ね達成されていることがうかがえる。その中でも、特にQ1およびQ2では肯定的回答が高く、学生が他者理解や協働性を身に付けていることがうかがえる。一方で、Q6「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」では「あまり身に付いていない」とする回答も一定数みられ、社会的視野や国際的視点を育成する教育機会のさらなる充実が望まれる。

II. 学修行動と学生生活について

1. 授業関連について

Q7「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」については、「頻繁にした」「時々した」の合計が85%以上(小数点以下四捨五入・以下同様)を占めており、多くの学生が授業外学修に取り組んでいることがうかがえる。同様にQ8「学修支援システム(「manaba」)を利用した勉強」についても75%が利用しており、ITを活用した学修が定着していることが示唆された。Q10「就職や資格取得に関わる勉強」や、Q11「友人と一緒に勉強」では、「頻繁にした」「時々した」の合計が80%以上と肯定的回答が高く、救急救命士国家試験や消防機関への就職を意識した主体的な学修習慣および協働的な学修活動が定着していることがうかがえる。一方、Q9「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」、Q12「メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した勉強」、Q13「学内の自習用教室等を利用した勉強」の3項目については65%を下回り、他項目と比較するとやや低値であり、教員との積極的なコミュニケーションの促進や、学修支援環境のさらなる活用促進が今後の課題と考えられる。

2. 授業期間中の時間配分について

Q14「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間(1日あたり)」では、1時間以上学修している学生が多数を占め、一定の学修習慣が形成されていることがうかがえる。Q15「学内で過ごす時間(1日あたり)」は4時間以上が多く、授業外でも学内に残って学修している学生が一定数存在していた。Q16「睡眠時間(1日あたり)」については、全体として大きな問題はないものの、4時間未満の学生も一部みられ、生活リズムや健康管理への指導が必要である。Q17「趣味や娯楽の時間(1日あたり)」については4～5時間の学生は12%であり、その程度であれば、学修活動との両立に大きな支障はないものと考えられる。一方で、8時間以上を趣味・娯楽に充てている学生も少数ながら認められ、生活指導が必要と考えられる。Q18「電子書籍を含む読書時間(1日あたり)」では1時間未満が60%を超えており、昨年同様、読書時間の確保が十分とは言えない状況が継続している。

3.授業期間中の行動について

Q19「全履修科目を平均した場合の授業欠席回数15回授業を基準にして)」では、欠席「0～2回」の学生で59%と、大学全体の69%をやや下回っている。Q20「部活動やサークル活動を行った回数(1週間あたり)」では「1回以上」が39%を占めており、大学全体の23%より多い傾向にある。Q21「アルバイトの回数(1週間あたり)」では、83%の学生が週複数回のアルバイトを実施しており、経済的理由や社会経験の獲得を背景としていると考えられる。Q22「ボランティア活動の回数(1年間あたり)」では、「なし」が71%であり、大学全体の76%よりは低い。が、地域活動や社会貢献活動への参加機会の周知および促進が課題と考えられる。

4.本学の教育内容や設備、学生支援について

Q23「授業の内容」、Q24「所属する学科・コースのカリキュラム」、Q25「学生生活」、Q26「講義教室の設備(空調や照明を含む)」、Q27「演習室や実習室の設備や器具」、Q28「メディアライブラリー(図書室)の設備や学修環境」、Q29「事前事後学修・課題のための学修スペース」、Q30「保健室や付属の医療施設」、Q32「学科・コースの教員による指導・相談」、Q33「事務職員によるサポート」、Q34「就職支援室による進路・就職に関する支援」、Q35「大学全般を総合的に判断して」など、多くの項目で「とても満足」「やや満足」の割合が80%前後を占めており、教育内容、施設設備および学生支援に対する満足度は総じて高い水準であった。

5.不安や悩みに関して

Q36「授業内容についていけない」については、「少しある」「大いにある」の合計が22%とやや低い一方で、Q38「希望の就職先や進路先へ行けるか不安だ」については50%とやや高く、一定の不安を抱える学生が多いことがわかった。特に就職先などの進路不安は高学年でも一定割合存在しており、満足度の高かった就職支援の継続が必要と考えられる。また、Q43「精神面の健康状態への不安や悩みがある」についても、一定数の学生が精神的な不安や悩みを抱えていることが確認され、相談体制やメンタルサポートの継続が必要である。Q44「不安や悩みにおける主な相談相手」では、友人や家族が75%を占め、身近な人間関係を通じて問題解決を図る傾向がみられた。

Ⅲ.デジタルツールの活用について

Q45「生成AIをどの程度利用していますか」では、「頻繁に利用している」「時々利用している」の合計が69%を占めており、生成AIが学生の日常的学修ツールとして浸透しつつあることが示された。Q46「主な利用用途に最もあてはまるものを選択してください」については、「授業課題やレポートの作成」「情報の収集」が64%を占め、学修支援ツールとして活用されていることがわかる。一方で、Q47「生成AIから出力された結果が正しいか確認していますか」については、出力結果の妥当性を十分に確認していない学生も22%と一定数認められ、情報リテラシー教育の重要性も示唆された。また、Q48「生成AIの活用は自分の将来に必要なスキルだと思いますか」については、生成AIの活用を将来必要なスキルと認識している学生は多く、教育活動への効果的な導入が期待される。また、Q49「帝京平成大学で発行しているオープンバッジについて存在を知っていますか」については、全学年で15%と大学全体の16%と大差はない。Q50「就職活動に

オープンバッジを活用したいと思いますか。(すでに就職活動が終了している場合は活用しましたか。)」についても、「そう思う(活用した)」が、全学年で14%と大学全体の11%より若干高い傾向にあるが、まずは、オープンバッジの認知度向上と魅力の発信が課題と考えられる。

IV.学修成果について

Q51以降の「大学入学時と比べて身に付いた能力」については、多くの項目で「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」の回答が80%以上を占め、学生自身が成長を実感していることが示された。特にQ53「他者とのコミュニケーション能力」、Q55「傷病者の生命を尊重する態度」、Q61「チーム活動における協調性」では90%を上回り、Q54「救急救命士になる使命感と責任感」でも82%を上回るなど、救急救命士として必要な資質・心構えに関する様々な実践能力が身に付いたことが示された。

◎4年生に関して

「4年間の学生生活を総括する」という視点から、以下、4年生のアンケート結果について、全学年の結果と比較して別に検討する。

I.本学の「目標とする力」の修得について

項目1. 本学の「目標とする力」の修得状況については、すべての設問において「十分身に付いた」と「やや身に付いた」の合計が80%を超えており、4年間の教育成果が表れていることがうかがえる。特に、Q1「人間愛」、Q2「他者と協働する力」、Q3「自立して逞しく生きる力」においては、90%を超える高い評価を示しており、社会人として必要な基礎的能力の修得が進んでいることがうかがえる。

II.学修行動と学生生活について

項目2. 授業関連については、Q9「授業中やオフィスアワーを利用した教員への質問や要望」、Q10「就職や資格取得に関わる勉強」の項目が、全学年を上回り、国家試験や就職活動を見据えた主体的な学修行動が認められ、自ら課題解決を図る姿勢がうかがえた。

項目3. 授業期間中一日あたりの時間配分については、Q14「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間(1日あたり)」が、全学年と比較して低い傾向が認められ、就職活動や国家試験対策への時間配分の増加が影響していると考えられる。一方で、学内滞在時間はやや短く、就職活動等の影響が考えられる。

項目4. 授業期間中の行動については、授業出席回数やアルバイトの回数は全学年と比較して減少傾向にあり、就職活動や国家試験対策を優先している状況がうかがえた。

項目5. 本学の教育内容や設備、学生支援については、高い満足度が認められた。特にQ29「事前事後学修・課題のための学修スペース」の満足度は、全学年と比較しても高い。また、教員による学修支援や進路・就職支援に対する評価も全学年より高く、卒業を目前に控えた段階においても教育環境への満足感が維持されていることが示された。

項目6. 不安や悩みに関しては、授業理解や進路に関する不安は全学年より低い傾向であった。一方で、身体面・精神面の健康に関する不安を抱える学生も一定数認められるため、卒業まで継続した支援が必要である。また、不安や悩みの相談相手が、全学年と比較すると家族が多い傾向にあり、家族が

相談相手として重要であることがうかがえる。

項目7. デジタルツールに関しては、全学年と比較して、生成AIの利用率は高いものの、生成AIから出力された結果が正しいかの確認率が低下しており、情報リテラシー教育における何らかの対策が必要と考えられる。また、オープンバッジの認知度については、4年生が最も低いものの活用率は3年生より高かったが、全学年同様、認知度向上と魅力の発信が課題と考えられる。

Ⅲ.学修成果について

大学入学時と比べて以下に掲げる「能力」が身に付いたかに関しては、一定の質問において、「十分付いた」と「かなり付いた」の合計は、4年生の回答が全体の回答を上回っており、特に以下に掲げる能力の習得については、高い自己評価が認められた。

- ・「文章(レポート)を書く能力」
- ・「他者とのコミュニケーション能力」
- ・「人体の構造と機能に関する基本的知識」
- ・「救急疾患に関する基礎知識」
- ・「心肺蘇生に関する基礎知識」
- ・「救急疾患の重症度・緊急度を判断できる能力」
- ・「臨床実習の場で傷病者の状態を把握する能力」

上記の結果から、特に「他者とのコミュニケーション能力」、「救急疾患・心肺蘇生に関する基礎知識」、「救急疾患の重症度・緊急度を判断できる能力」や「臨床実習における傷病者の評価能力」など、救急救命士として必要な専門的能力については、特に高い自己評価が認められた。4年生については、卒業を前に4年間で振り返り、大学入学時と比較して自身の専門知識や実践能力が大きく向上したことを実感していると考えられる。特に国家試験対策や臨床実習を通じて培われた知識・技能・経験が、自己評価の向上につながったものと思われる。救急救命士として社会に貢献するための基礎的資質を十分に修得したと認識している学生が多いことが示された。

Ⅳ.全体のまとめ

救急救命士コースの学生は、国家試験合格および消防機関等への就職を目標として主体的に学修しており、専門知識や協働性、使命感など多くの能力の向上を自覚していることが確認された。特に ICT や生成AI など新しい学修ツールを活用しながら学修を進めている点は、特徴的であるものの、情報リテラシー教育などにより、生成AIの正確性について十分認識させる必要があると考えられる。一方で、教員への積極的な質問や読書習慣、ボランティア活動への参加については改善の余地があり、今後は主体的学修姿勢や社会的視野を広げる教育支援が求められる。また、進路不安や精神面の悩みを抱える学生への継続的支援も重要な課題である。今後は、国家試験対策や就職支援を継続しつつ、読書習慣の定着、ボランティア活動への参加促進、生成AIの適切な活用に関する教育を充実させることで、専門職として必要な知識・実践能力のみならず、幅広い教養と社会性を備えた人材の育成を推進していく必要がある。

以上

2025 年度 健康医療スポーツ学部

医療スポーツ学科 トレーナー・スポーツコース、アスリートコース

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

項目 1 本学の「目標とする力」がどの程度身についたか

設問 1、「人間愛(利他の心)は身に付きましたか」は、トレーナー・スポーツコース(以下トレスポ)において、「十分身についた」「やや身についた」の合計が 96.5%、アスリート・コース(以下アスリート)は 97.0%であった。設問 2、「他者と協働する力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 95.8%、アスリート 99.4%であった。設問 3、「自立して逞しく生きる力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 93.4%、アスリート 96.3%であった。設問 4、「創造的な問題解決能力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 91.8%、アスリート 93.3%であった。設問 5、「専門性を高める意欲と力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 96.1%、アスリート 93.3%であった。設問 6、「わが国と世界の持続・発展に尽くす力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 86.9%、アスリート 84.2%であった。概ねどの設問においても高い数値で好結果となっている。「目標とする力」が身についているとの自覚が学生にはあることがわかる。

項目 2 2025 年度の授業に関連して、以下のことをどのくらいしましたか。

設問 7、「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」は、トレスポにおいて、「頻繁にした」「時々した」の合計が 77.2%、アスリートは 66.5%であった。設問 8 「学修支援システム(「manaba」)を利用した勉強」は、同様にトレスポ 83.8%、アスリート 78.1%であった。設問 9、「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」は、同様にトレスポ 51.0%、アスリート 51.8%であった。設問 10、「就職や資格取得に関わる勉強」は同様にトレスポ 76.8%、アスリート 64.1%であった。設問 11、「友人と一緒に勉強」は、同様にトレスポ 74.1%、アスリート 70.7%であった。設問 12、「メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した勉強」は、同様にトレスポ 57.2%、アスリート 51.2%であった。設問 13、「学内の自習用教室等を利用した勉強」は、同様にトレスポ 46.7%、アスリート 42.6%であった。設問 7、「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」および、設問 10、「就職や資格取得に関わる勉強」がやや高値であった。これらは、アドミッション・ポリシーにある、指導者や教員養成に関わる資格取得に意欲のある入学者の受け入れが概ね行われている結果と考えられる。また、設問 8 「学修支援システム(「manaba」)を利用した勉強」は項目内で両コース共に最高値を示しており、学修における ICT の活用が進んでいると考えられる。

項目 3 2025 年度を平均して、授業期間中一日あたり以下のことにかけた時間について

設問 14、「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間(1日あたり)」は、「1 時間未満」がトレスポ 33.6%、アスリート 53.0%で授業時間外の学修がわずかで残念な結果となった。設問 15、「学内で過ごす時間(1日あたり)」は、2～4 時間の層が多く、トレスポ 35.2%、アスリート 28.0%であった。全体をみると概ね半数の学生が 2～5 時間の滞在時間となっている。また、アスリートは「8 時間以上」が

17.1%(トレスポ 12.7%)であり運動部の活動時間が反映していると考えられる。設問 16、「睡眠時間(1日あたり)」は、5～7時間の層が多く、トレスポ 59.0%、アスリート 54.8%であった。設問 17、「趣味や娯楽の時間(1日あたり)」は、1～3時間の層が多く、トレスポ 42.5%、アスリート 51.2%であった。スポーツや健康を学ぶ学生として、アスリートでは競技者のコンディショニングの観点から、睡眠時間を増加(8時間を確保)することも必要と考えられる。設問 18、「本(電子書籍を含む)を読んだ時間(1週間あたり)」は、1時間未満の層が多く、トレスポ 62.2%、アスリート 68.3%であった。大学全体でも同様の結果となり「本離れ」が進んでいると考えられる。

項目 4 2025 年度を平均して、授業期間中以下のことをした時間について

設問 19、「全履修科目を平均した場合の授業欠席回数(15 回授業を基準にして)」は、「なし」「1～2 回」の層がトレスポ 65.3%、アスリート 68.9%で概ね良好といえる。設問 20、「部活動やサークル活動を行った回数(1週間あたり)」で「なし」がトレスポ 58.7%、アスリート 9.1%と相反した。競技者を受け入れるアドミッション・ポリシーのアスリートは強化部所属の学生が多くこの結果になったと考えられる。設問 21、「アルバイトの回数(1 週間あたり)」は、トレスポにおいて「なし」の層が 8.5%となり、約 90%の学生がアルバイトをしている。アスリートにおいては「なし」の層が約 42.7%となり、約 60%の学生がアルバイトをしている。両コース共にアルバイトを行っている学生が多い。トレスポでは週 4 回以上の学生が 36.3%おり、アルバイトが学生生活を支えている現状が推察できる。設問 22、「ボランティア活動の回数(1 年間あたり)」は、トレスポにおいて「なし」の層が 59.1%、アスリート 65.9%となっている。ボランティア活動は「自主性」「社会性」を高める機会となるため、コースにおいて学生への案内を積極的に行いたいと考えている。

項目 5 本学の教育内容や設備、学修支援に関して

設問 23、「授業の内容」は、「とても満足」「やや満足」しているが、トレスポ 85.3%、アスリート 93.9%であった。設問 24、「カリキュラム」は、同じくトレスポ 89.1%、アスリート 95.7%で授業や教育内容について満足度が高いといえる。カリキュラムポリシーと学生のニーズに乖離がないことがわかる。設問 25、「学生生活」は、同じくトレスポ 84.9%、アスリート 93.3%であった。施設に関しては、設問 26、「講義教室の設備(空調や照明を含む)」、設問 27、「演習室や実習室の設備や器具」、設問 28、「メディアライブラリー(図書室)の設備や学修環境」、設問 29、「事前事後学修・課題のための学修スペース」、設問 30、「保健室や付属の医療施設」、設問 31、「学生食堂」において同じく 80～90%台を占め満足度が高いことがわかる。学習支援に関しては、設問 32、「学科・コースの教員による指導・相談」、設問 33、「事務職員によるサポート」、設問 34、「就職支援室による進路・就職に関する支援」は、両コースともに同じく 80～90%台を占め満足度が高いことがわかる。特に、設問 33、「事務職員によるサポート」では、トレスポ 91.9%、アスリート 92.1%で事務職員のサポートが厚く、それに対しての学生の満足度も非常に高いことがわかる。設問 35、「大学全般を総合的に判断して」は、同じくトレスポ 86.1%、アスリート 91.4%であり、総じて両コースの学生の教育内容、設備、学修支援について満足度が高くカリキュラムポリシーが学生に反映されていると考えられる。

項目 6 不安や悩みに関して

質問項目で「大いにある」「少しある」の回答が多いのが、設問 38、「希望の就職先や進学先へいけるか不安だ」で、トレスポ 49.0%、アスリート 38.4%。続いて設問 35、「卒業後にやりたいことがみつからない」トレスポ 28.9%、アスリート 26.8%であった。総じて将来に関しての不安や悩みが大きいことがわかる。さらにそれら悩みの相談相手は、設問 44、「主な相談相手」から、友人や家族が上位で、「大学の教職員」はトレスポ 1.9%、アスリート 2.2%と低値であった。学生は友人や家族のように「近い存在」を相談相手とすることが多い。我々教員は「指導」という観点から、授業やセミナー、オフィスアワー等で進路・就職指導を継続する必要があると考えられる。

項目 7 デジタルツールについて

設問 45、「生成 AI の利用」は、「頻繁に利用している」「時々利用している」がトレスポ 81.8%、アスリート 80.5%と利用頻度が多い。設問 46、「利用用途」は、トレスポが「情報収集」36.3%、アスリートが「授業課題やレポートの作成」45.1%が最も多い。設問 47、「生成 AI からの出力された結果の確認」は、「確認している」「時々確認している」がトレスポ 85.3%、アスリート 80.5%と結果の検証を行っている。設問 48、「生成 AI の活用は自分の将来に必要なスキルだと思うか」は、「そう思う」「ややそう思う」がトレスポ 87.3%、アスリート 84.8%とスキルの必要性を認識している。これらの結果から、学生は AI を学修行動に取り入れており情報の確認に至るまで、AI 活用のリテラシーを身につけていると考えられる。PC 関連の授業効果と考えられる。「オープンバッジ」についての設問 49、「オープンバッジの存在を知っているか」は、「知らない」がトレスポ 80.7%、アスリート 84.8%とほとんどの学生が認識していなかった。設問 50、「就活でのオープンバッジの活用」は、「活用した」がトレスポ 19.7%、アスリート 18.3%となり、学生の認識や就活での活用が低い現状がある。今後コースとしてオープンバッジの導入を行う必要があると考えられる。

●学修成果について

大学入学時に比べて能力がついたと思うか

コースの教育内容(カリキュラムポリシー)を反映した専門知識についての設問 57、「健康・運動に関する専門知識」(アスリートは、設問 58、「スポーツ医科学に関する専門知識」)、「少し付いた」「かなり付いた」「十分付いた」がトレスポ 96.5%、アスリート 94.6%。また、実践力についての設問 61、「体育・スポーツ・健康に関する実践力」(アスリート設問 62)では、同じくトレスポ 97.7%、アスリート 96.9%。さらに、設問 66、「実習、現場体験、ボランティア経験等によって身につく社会貢献力」では、同じくトレスポ 92.7%、アスリート 92.0%となり、専門的な知識と実技能力を取得し、それらをディプロマポリシーにある「積極的な社会貢献姿勢」として発揮する学修成果を得ていると考えられる。

4 年生「成長実感・満足度」

前出の学修成果の結果を、4 年生の「成長実感・満足度」としてしてみると、コースの教育内容を反映している、専門知識についての設問 57、「健康・運動に関する専門知識」(アスリートは設問 58、「スポーツ医科学に関する専門知識」)、「少し付いた」「かなり付いた」「十分付いた」がトレスポ 94.8%、アスリート 100.0%。特に「十分付いた」がトレスポ 55.8%、アスリート 56.7%となり、1 学年から 3 学年と比較して高値

を示し、4 年生での成長実感・満足度が高くなっている。実践力についての設問 61、「体育・スポーツ・健康に関する実践力」(アスリート設問 62)では、「少し付いた」「かなり付いた」「十分付いた」がトレスポ 97.4%、アスリート 100.0%。実践力においても「十分付いた」がトレスポ 57.1%、アスリート 60.0%と 1 学年から 3 学年と比較して高値になっており、4 年生での成長実感・満足度が高くなっている。4 年間での専門的な知識と実技能力の取得をほとんどの 4 年生が高く実感していると考えられる。

まとめ

トレスポ・アスリートの学生は、指導者や教員養成に関わる資格取得に意欲のある学生がそれらの資格取得を軸に学修を行っている。教育内容や設備、職員らによる学修支援に関して満足度も高い。AIの活用もリテラシーを身につけて実践している。学修成果については、専門的な知識や実践能力についての成長を学年が進むにつれて感じている。その一方で、アルバイトを行う学生が多く、学生生活をアルバイトで支えている現状も見受けられ、「忙しい生活」を送っている。また、将来に関しての不安や悩みを持っている者が多い。我々教員は、単に専門知識の教育だけではなく、セミナー等で生活面や進路・就職指導を継続する必要があると考えられる。

以上

2025 年度 健康医療スポーツ学部

医療スポーツ学科 動物医療コース

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

本コースは、動物医療分野の専門職である愛玩動物看護師の養成を目的としており、講義、実習、学内飼育動物の飼養、臨床現場を意識した教育を通じて、専門的知識・技術だけでなく、他者と協働する力、動物に対する倫理観、社会人としての姿勢を育成することが求められる。

本コースは 2022 年度に開設され、2025 年度に完成年度を迎えた。2024 年度までは 1 年生から 3 年生までのデータに限られていたが、2025 年度は全学年の結果が得られたことで、本コースの傾向や実態が鮮明になった。2025 年度学修行動と学修成果の調査結果(学科・コース別)において、設問「大学全般を総合的に判断して」では、本コースの学生のうち「とても満足」が 28.8%、「やや満足」が 61.9%であり、合計 90.7%が満足と回答していた。これは大学全体よりも高い数値であり、本コースの学生が大学生活や教育内容を概ね肯定的に受け止めていることを示している。

さらに、設問「学科・コースの教員による指導・相談」では、本コースの「とても満足」が 42.4%、「やや満足」が 50.0%であり、合計 92.4%が満足と回答していた。特に「とても満足」の割合が比較的高いことから、日頃の講義・実習・学生対応を通じた教員との関わりが、学生の安心感や学修意欲に一定の好影響を与えていると考えられる。

1. 本学の「目標とする力」がどの程度身に付いたか

設問 2「他者と協働する力」では、本コース全体で「十分身に付いた」が 46.6%、「やや身に付いた」が 47.5%であり、合計 94.1%の学生が肯定的に回答している。また、設問 5「専門性を高める意欲と力」についても、「十分身に付いた」が 43.2%、「やや身に付いた」が 48.3%であり、合計 91.5%であった。これらの結果から、実習やグループワーク、学内飼育動物の飼養活動などを通じて、動物医療に必要な協働性や専門性への意欲が一定程度育成されていると考えられる。

一方で、設問 6「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」については、「十分身に付いた」が 22.0%にとどまり、「あまり身に付いていない」17.8%、「全く身に付いていない」6.8%と、他の項目に比べて課題が残る結果であった。動物医療は、動物福祉、公衆衛生、One Health、地域社会との関わりなど、社会的課題と密接に関連する分野である。今後は、専門科目や実習の中で、動物医療と社会とのつながりをより明確に示し、学生が自らの専門性を社会的役割として捉えられるような教育を進める必要がある。

2. 2025 年度の授業に関連した学修行動

2025 年度の授業に関連した学修行動では、設問 7「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」において、本コース全体で「頻繁にした」が 22.9%、「時々した」が 60.2%であり、合計 83.1%であった。大学全体の合計 77.9%と比較すると、本コースの学生は授業課題や予習・復習に一定程度取り組んでいると

考えられる。一方で、設問 8「manaba を利用した勉強」では、「頻繁にした」と「時々した」の合計が 67.8%であり、大学全体と比較してやや低い傾向がみられた。特に 4 年生では、「頻繁にした」が 7.1%、「時々した」が 35.7%であり、合計 42.8%にとどまっていた。また、設問 9「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」についても、「頻繁にした」と「時々した」の合計は 34.7%であり、大学全体より低かった。これは、学生が授業外で教員に質問する機会を十分に活用できていない可能性を示している。設問 11「友人と一緒に勉強」では、本コース全体で「頻繁にした」と「時々した」の合計が 65.3%であり、大学全体と比較して、友人と一緒に学修する機会がやや少ない傾向がみられた。

一方、設問 10「就職や資格取得に関わる勉強」では、4 年生の「頻繁にした」が 60.7%と非常に高く、卒業、国家試験、就職を目前にした学年では、学修目的が明確化していることが示された。今後は、このような進路・資格取得に向けた意識を 4 年生になってから急激に高めるのではなく、1 年生から 3 年生の段階から徐々に育成することが重要である。

3. 授業期間中の時間の使い方

授業期間中の時間の使い方については、授業時間外学修の確保が課題である。設問 14「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間」では、本コース全体で「1 時間未満」が 20.3%、「1～2 時間」が 36.4%であり、合計 56.7%の学生が 1 日 2 時間未満の学修時間であった。2024 年度報告でも、授業時間外の学修時間の不足は課題として挙げられており、2025 年度においても継続的な課題と考えられる。ただし、4 年生では「1 時間未満」が 7.1%にとどまり、他学年と比較して短時間学修の学生が少なかった。これは、国家試験や就職活動を目前に控え、学修時間を意識的に確保する学生が増えていることを反映している可能性がある。一方で、4 年生であっても授業時間外学修が 1 日 1 時間未満の学生が一定数存在することから、この割合をさらに減少させ、国家試験や専門職としての実践に向けた継続的な学修習慣を定着させることが今後の課題である。

また、設問 16「睡眠時間」では、6 時間未満の学生も一定数みられ、生活リズムや体調管理への配慮も必要である。設問 18「本を読んだ時間」では、全体として読書時間が短い傾向にあり、愛玩動物看護師として必要な文献や資料を自主的に読む習慣の形成にも課題が残る。今後は、授業内で文献や資料の活用を促す課題を設定するなど、限られた時間の中でも主体的な学修習慣を身に付けられる工夫が必要である。

4. 授業期間中の活動回数

設問 21「アルバイトの回数」では、週 3 回以上アルバイトを行っている学生が本コース全体で 66.1%であり、大学全体の 54.8%を上回っていた。この結果から、アルバイトに多くの時間を費やしている学生が多いことがうかがえる。アルバイトの時間が多いことは、学修時間の確保や睡眠時間だけでなく、出席日数や授業中の集中力にも影響する可能性が懸念される。

設問 20「部活動やサークル活動」では、「なし」が 85.6%であり、大学全体の 77.2%より高かった。また、設問 22「ボランティア活動」でも「なし」が 80.5%であり、大学全体よりやや高い結果であった。動物医療コースは専門性が高く、他学科・他コースと学修内容や進路が異なるため、学内の一般的な課外活動に参加しにくい可能性がある。また、アルバイト頻度の高さも課外活動への参加を制限していると考えられる。

一方で、愛玩動物看護師にはチーム医療や対人コミュニケーション能力も求められるため、授業や実習以外の場でも他者と関わる機会をどのように確保するかが今後の課題である。動物医療に関連するボランティア、保護活動、学内イベントなどを通じて、学生が専門性と社会性を同時に育成できる機会を検討する必要がある。

5. 本学の教育内容や設備、学修支援への満足度

教育内容や学修支援に関する満足度は、全体として概ね高い結果であった。設問 23「授業の内容」では、「とても満足」が 27.1%、「やや満足」が 61.0%で、合計 88.1%であった。設問 24「所属する学科・コースのカリキュラム」では、「とても満足」が 32.2%、「やや満足」が 58.5%で、合計 90.7%であった。

また、設問 32「学科・コースの教員による指導・相談」では、「とても満足」が 42.4%、「やや満足」が 50.0%であり、合計 92.4%と高い満足度が示された。これは、2024 年度報告でも示されていた本コース教員による指導・相談への高い評価が、2025 年度においても維持されていることを示している。

一方で、設問 26「講義教室の設備(空調や照明を含む)」では、本コース全体の満足度が大学全体よりやや低い傾向がみられた。特に 3 年生では、「やや不満」が 23.5%、「とても不満」が 20.6%であり、不満を示した学生が合計 44.1%と他学年に比べて高かった。

この結果から、教育内容や教員への満足度が高い一方で、講義教室などの学修環境については、一部の学年で課題として認識されている可能性がある。講義教室の設備に対する不満については、現在の千葉キャンパス施設の老朽化も一因であると考えられる。2026 年度以降は、新キャンパスへ移転する予定であり、講義教室や学修環境の整備により、これらの課題は一定程度解消されることが期待される。一方で、移転後も学生がどのような点に不満や不便を感じているのかを必要に応じて確認し、学修環境のさらなる改善につなげていく必要がある。

6. 現在の不安や悩み

学生の不安や悩みについては、授業内容、進路、経済面に関する項目が重要である。設問 36「授業の内容についていけない」では、「少しある」が 23.7%、「大いにある」が 3.4%であり、一定数の学生が授業理解に不安を抱えている。特に専門科目が増える学年では、学修内容の難度が上がるため、早期からの学修支援が必要である。

設問 37「卒業後にやりたいことがみつからない」では、本コース全体で「少しある」が 21.2%、「大いにある」が 8.5%であり、進路に関する不安は大きい。ただし、4 年生では「全くない」が 42.9%と高く、学年進行に伴い進路の具体化が進んでいることがうかがえる。一方で、設問 38「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」では、4 年生でも「少しある」が 17.9%、「大いにある」が 3.6%であり、進路が具体化する一方で、希望する進路に進めるかという不安は残っていることもうかがえる。

設問 39「経済的に勉強を続けることが難しい」については、「少しある」が 9.3%、「大いにある」が 2.5%であり、少数ではあるものの深刻な課題を抱える学生が存在する。アルバイト頻度の高さとも関連して、経済的背景が学修行動に影響している可能性があるため、必要に応じて学生支援制度や相談窓口につなげる対応が求められる。

また、設問 40「学内の友人関係に悩みがある」、設問 41「家族との関係に悩みがある」、設問 42「身体面

の健康状態への不安や悩みがある」、設問 43「精神面の健康状態への不安や悩みがある」については、学生生活の継続や学修意欲に関わる重要な項目である。これらの項目では、いずれも「少しある」または「大いにある」と回答した学生が一定数認められた。特に、身体面・精神面の健康状態への不安や悩みは、出席状況、授業中の集中力、学修継続、進路選択にも影響し得るため、教員による日常的な声かけや状況把握に加え、必要に応じて学生相談室等の学内支援につなげる体制を継続する必要がある。

7. デジタルツールに関する状況

デジタルツールについては、生成 AI の利用が学生の間で一定程度浸透している。設問 45「生成 AI をどの程度利用していますか」では、本コース全体で「頻繁に利用している」が 25.4%、「時々利用している」が 39.8%であり、合計 65.2%の学生が生成 AI を利用している。大学全体と比較するとやや低いものの、すでに多くの学生が学修や情報収集に生成 AI を活用していると考えられる。

設問 46「生成 AI の主な利用用途」では、情報の収集が 44.9%と最も高く、授業課題やレポートの作成も 24.6%であった。また、設問 47「生成 AI から出力された結果が正しいか確認していますか」では、「確認している」が 42.4%、「時々確認している」が 39.0%であり、合計 81.4%の学生が何らかの確認を行っている。一方で、確認が不十分な学生も一定数存在するため、生成 AI の利便性だけでなく、出力内容の正確性を検証する力、引用や剽窃に関する倫理的理解を教育する必要がある。

また、設問 49「帝京平成大学で発行しているオープンバッジについて存在を知っていますか」では、本コース全体で「知っている」が 29.7%であり、大学全体よりは高いものの、十分に認知されているとはいえない。今後は、就職活動や学修成果の可視化と関連付けながら、オープンバッジの意義や活用方法を学生に周知することが望まれる。

まとめ

2025 年度は、動物医療コースが完成年度を迎え、4 年生を含む全学年のデータが得られた点で重要な年度であった。全体として、本コースでは、他者と協働する力、専門性を高める意欲、カリキュラムへの満足度、教員による指導・相談への満足度が高く、専門職養成課程として一定の教育成果が認められる。特に 4 年生では、就職や資格取得に関わる勉強を「頻繁にした」学生が 60.7%に達しており、卒業、国家試験、就職を目前にしたことで、学修目的が明確になっていることが示された。

一方で、授業時間外学修の確保、manaba や図書館などの学修支援資源の活用、教員への質問機会の利用、アルバイト頻度の高さ、進路・経済面の不安などは、引き続き課題である。今後は、4 年生で高まる国家試験・就職への意識を、1 年生から 3 年生の段階から徐々に育成し、学修習慣の形成、進路意識の醸成、専門職としての自覚を早期から促す必要がある。

さらに、2026 年度からは、長年にわたり動物病院で勤務し、現在も動物病院の院長として臨床に従事している教員が加わったことにより、本コースの臨床教育のさらなる充実が期待される。動物医療の現場を熟知した教員による講義・実習・進路指導は、学生にとって臨床現場を具体的にイメージする機会となり、専門職としての意欲や実践力の向上に好影響を与えるものと考えられる。今後も、新たな教員の知見を取り入れながら、教員全体で教育内容と学生支援の改善を進めていく。

以上

2025 年度 健康医療スポーツ学部

看護学科

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

2025 年度学修行動調査アンケートについて、4 年生の回答を中心に昨年度との比較を主に分析した結果を以下にまとめた。

1. 本学の「目標とする力」がどの程度身についたかについて

【人間愛(利他の心)】は、「十分身についた」「やや身についた」と回答した結果は、4 年生の 88.7% (昨年 95.4%) であった。同様に【他者と協働する力】は、94.9% (昨年 100.0%)、【自立して逞しく生きる力】は、92.8% (昨年 100.0%)、【創造的な問題解決能力】は、91.8% (昨年 97.0%)、【専門性を高める意欲と力】は、95.8% (昨年 100.0%)、【わが国と世界の持続・発展に尽くす力】は 73.2% (昨年 92.3%) であった。

「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」以外は全て 9 割以上の学生が身についたと回答した。2024 年度は 100% の学生が身についたと回答した項目が複数あったが、2025 年度はそのような項目はなかった。また 2024 年度と同様に、「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」が身についたと回答する学生が最も少なく、また 8 割を下回る回答割合であった。2026 年度入学生から「国際看護学」を選択科目から必修科目へ変更したことで今後この項目について身についたと回答する学生が増加することが期待される。また旧カリキュラムの学生に対しては「国際看護学」を可能な限り選択するように勧め、国際的視野を持った看護職の育成を進めていきたいと考える。

2. 本学の教育内容や設備、学修支援に関する満足度について

【メディアライブラリー(図書館)の設備や学修環境】は、「とても満足」「やや満足」と回答した結果は、4 年生の 85.5% (昨年 90.8%) であった。同様に、【演習室や実習室の設備や器具】は、70.1% (昨年 87.7%)、【講義教室の設備(空調や照明を含む)】は、53.6% (昨年 72.3%)、【学生食堂】は、76.3% (昨年 89.1%)、【所属する学科・コースのカリキュラム(昨年度:所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容)】は、71.2% (昨年 92.4%)、【学科・コースの教員による指導・相談】は、71.1% (昨年 90.8%)、【事務職員によるサポート】は 69.1% (昨年 81.6%)、【保健室や付属の医療施設】は、79.4% (昨年 93.9%) であった。

全ての項目で昨年と比較して満足と回答した学生の割合が減少した。2024 年度の 4 年生は千葉キャンパスでの修学は 4 年次 1 年間のみであり、2025 年度の 4 年生は千葉キャンパスでの修学が 3 年次および 4 年次の 2 年間であることが影響した可能性が考えられる。特に 3 年次は演習科目が多いので、ちはら台キャンパスの演習室と比較して不満が高まった可能性がある。また講義室のモニター設備や最近の夏の暑さに対する空調設備への不満があったことも考えられる。カリキュラムに関しては 2024 年度 4 年

生と 2025 年度 4 年生の間に差はないので、今後学生がどのような点に不満があるのかを学科において調査する必要があるが、2026 年度入学生より科目の大幅な変更はないが、一部の科目で開講年度の変更を行っており、その変更の効果も今後注視していきたいと考える。教員による指導・相談に関しては、現在のキャンパスでは看護学科教員は講義棟とは異なる場所に研究室が設置されており、学生がオフィスアワーなどを活用して教員に相談することが難しい可能性がある。しかし来年度の新キャンパスでは研究室の配置も学生が相談などしやすい環境になるので、改善されるのではないかと考えられる。

また「事務職員によるサポート」についての満足度は 7 割を割っている。学修面以外の学生に関する相談窓口として今後、事務職員のサポートはより一層重要になると考えられ、学生が不満に思う内容について具体的に把握し、改善できればと考える。

一方、「学生食堂」に関しては満足度が昨年は 9 割近かったが、今回は 8 割を下回っている。メニューの種類や営業時間に対する不満等が考えられるが、新キャンパスの新施設に期待したい。

3. 本学入学時と比べて、成長実感について

【授業の予習や復習、授業課題のための勉強】について、「頻繁にした」「時々した」を合わせると全学年では 78.5% (昨年 85.2% であった。学年別では、1 年生 68.7% (昨年 77.5%)、2 年生 71.9% (昨年 83.8%)、3 年生 86.0% (昨年 91.3%)、4 年生 85.6% (昨年 90.8%) であった。低学年はおおよそ 7 割、高学年はおおよそ 8 割であった。また、【就職や資格取得に関わる勉強】について、「頻繁にした」「時々した」を合わせると全学年では 62.1% (昨年 64.3%) であった。学年別では、1 年生 47.5% (昨年 33.4%)、2 年生 47.9% (昨年 69.7%)、3 年生 61.8% (昨年 67.1%)、4 年生 91.8% (昨年 93.9%) であった。2024 年度と比較すると全て減少しているが、学修の姿勢は、学年があがるとともに専門分野の授業が増え、授業の興味や関心が高まり、高学年はより意欲的になっていると考えられるのは昨年と同様であった。また昨年と同様に「就職や資格取得に関わる勉強」が 4 年次に 9 割を超えるが、低学年時から卒業後のイメージを持ちながら早い段階で学修に取り組むよう指導が必要と考える。

専門的な知識と技能の修得状況について、【看護学に関する専門的な知識】は、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した結果は、4 年生の 96.9% (昨年 98.4%)、【看護学に関する専門的な技術】は、95.9% (昨年 98.4%) であった。昨年と比較するとどちらも少し減少しているが、学内における講義および演習、さらに臨地における看護学実習によって、9 割以上の学生に成長実感が養われたことがうかがわれる。

次に、看護師としての心構えについて、【高い倫理観と豊かな人間性を備えた心温かい人間関係を創造する力】は、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した結果は、4 年生の 95.9% (昨年 97.2%) であった。このことから、高い倫理観や豊かな人間性、心温かい人間関係の創造など看護師に求められる能力について、昨年度と同様に高い割合の学生が修得できたと実感していることが確認できる。看護や医療に関する研究の心構えについて、【人間について幅広く理解する力】は、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した結果は、4 年生の 94.9% (昨年 98.4%) であった。同様に、【社会について幅広く理解する力】は 94.9% (昨年 98.4%)、【物事を科学的に考える力】は 92.9% (昨年 92.3%)、【地域における保健医療ニーズの特性を把握する力】は 95.9% (昨年 96.9%)、【地域にある人々の健康

生活を支援する力】は 96.9% (昨年 93.9%)、【保健医療福祉チームの一員として連携・協働する中で責任ある行動をとる力】は 95.9% (昨年 95.9%)、【看護専門職者として新たな課題を見だし探求する姿勢】は 93.7% (昨年 95.4%)、【看護専門職者として継続的に自己研鑽する力】は 93.7% (昨年 98.5%) であった。続いて、看護や医療の実践力について【看護の実践能力】は、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した結果は、4 年生の 95.8% (昨年 100.0%)、【科学的根拠に基づいた看護実践の展開】は、94.8% (昨年 98.4%) であった。4 年生の 90% 以上が身に付いたと回答し昨年より多少減少している項目が多いが、高い傾向であった。本学の建学の精神に則り、実学の精神を基本とした学内における講義および実習、そして臨地における看護学実習により専門知識を展開できる能力を在学中に成長させることができたと考えられる。

4. デジタルツールに関して

【生成 AI をどの程度利用していますか】について、「頻繁に利用している」「時々利用している」と回答したのは、1 年生 72.7%、2 年生 61.4%、3 年生 52.4%、4 年生 68.0% であり、全学年では 62.8% であった。また【主な利用用途】に関してはその他以外の上位 2 つが、1 年生は「授業課題やレポートの作成」が 37.4%、「情報の収集」が 35.4%、2 年生は「情報の収集」が 39.6%、「授業課題やレポートの作成」が 16.7%、3 年生は「情報の収集」が 44.5%、「授業課題やレポートの作成」が 7.8%、4 年生は「情報の収集」が 41.2%、「授業課題やレポートの作成」が 18.6% であった。一方【生成 AI から出力された結果が正しいか確認していますか】について、1 年生は「確認している」が 37.4%、「時々確認している」が 42.4%、2 年生は「確認している」が 36.5%、「時々確認している」が 45.8%、3 年生は「確認している」が 46.9%、「時々確認している」が 35.2%、4 年生は「確認している」が 38.1%、「時々確認している」が 41.2% であった。どの学年も半数以上の学生が生成 AI を利用しており、その結果が常に正しいか否かを確認しているのはどの学年も半数以下であった。生成 AI の有効活用は今後も増加していくと考えられるが、得られた内容が必ずしも正しいとは限らず、常にその正当性を確認する作業が生成 AI を利用する際には必要であることを学生には指導していくことが必要であると考えられる。

次年度以降も引き続き学生の声を十分に把握できるよう調査回答率の向上に取り組む予定である。具体的には、引き続き学修行動調査の重要性を学生および学科教員へ周知し十分な回答を得られるように電子メールやマナバ、ユニパ等による掲示を継続し、大学ホームページの結果公表および学生へのフィードバックにより対象学生の学修行動調査に対する理解が深まり協力が得られるべく取り組んでいきたい。また学生の学修行動を充実させるために学修環境をより充実させるよう学科として努力していきたい。

以上